

aFF

あふ
Agriculture Forestry Fisheries



特 集

若手農業者

若手農業者

を

取りまく環境



農業従事者は40代以上が大多数を占めています。統計をもとに新規就農者の実情と課題をひも解き、若手農業者たちが集うグループの活動を紹介します。





統計から読み解く



農業従事者の現状

基幹的農業従事者（15歳以上の世帯員のうち、ふだん仕事として主に自営農業に従事している者）のうち39歳以下が占める割合は、わずか4.5パーセントです。新たに農業に就く人たちは、どのような形で就農するのかを数字で見てみましょう。

基幹的 農業従事者

令和6年2月1日現在

全体 **111.4**万人

39歳以下

全体の
4.5%

5万人

新規就農者

令和5年

4万3,460人

農家出身者の割合

70%

新規雇用就農者（農業法人などで雇われる形で就農）

令和5年



9,300人

非農家出身者

87%

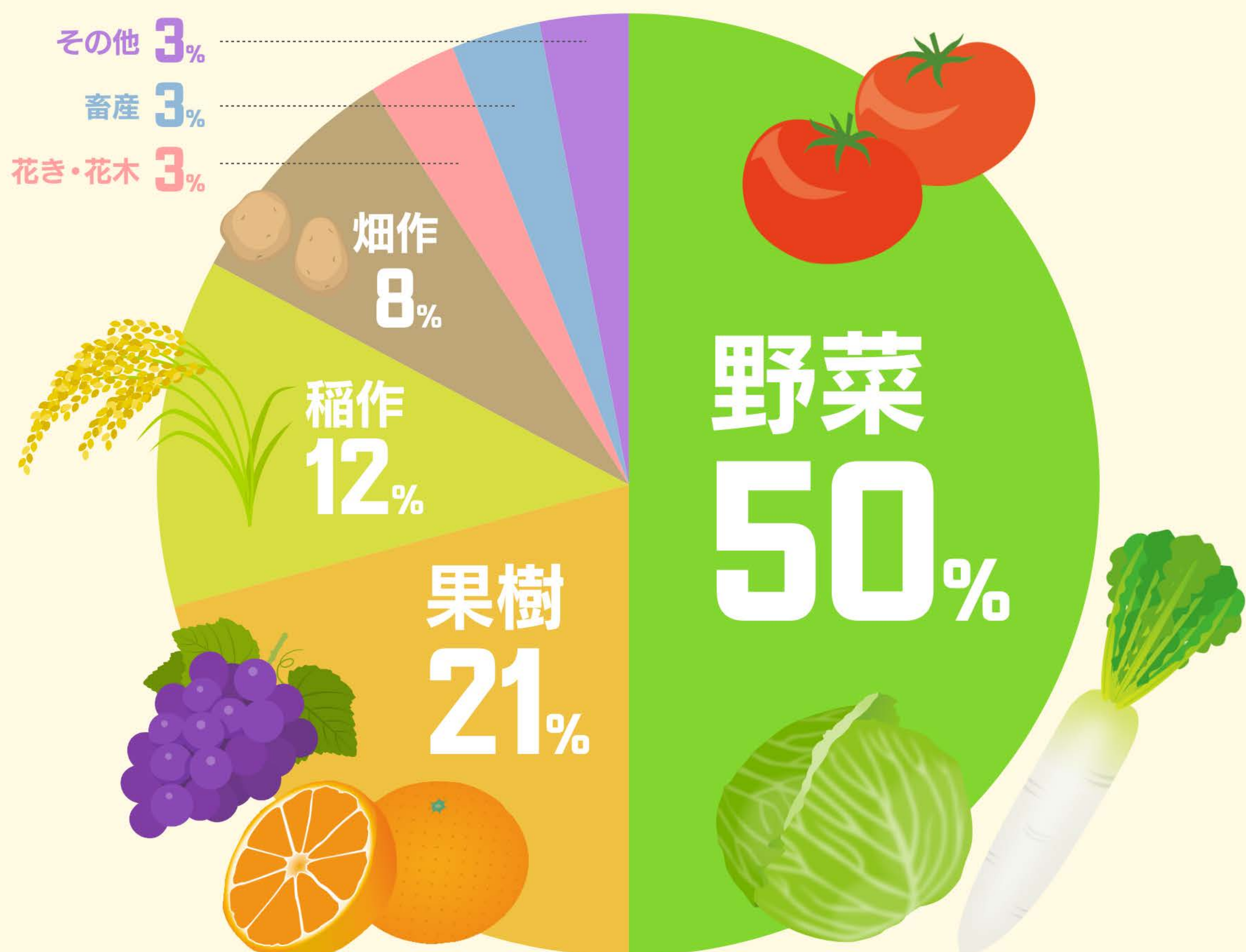
参考資料：農林水産省「令和5年新規就農者調査」「令和6年農業構造動態調査」

新規就農者の リアル

新規就農者の中心作物や就農理由、経営開始時の課題について、数字とともに紹介します。農業を開始する人たちのリアルな姿が見えてきます。

01

新規就農者の就農時の中心作物



出典：農林水産省「令和5年新規就農者調査」

02

新規就農者の就農理由

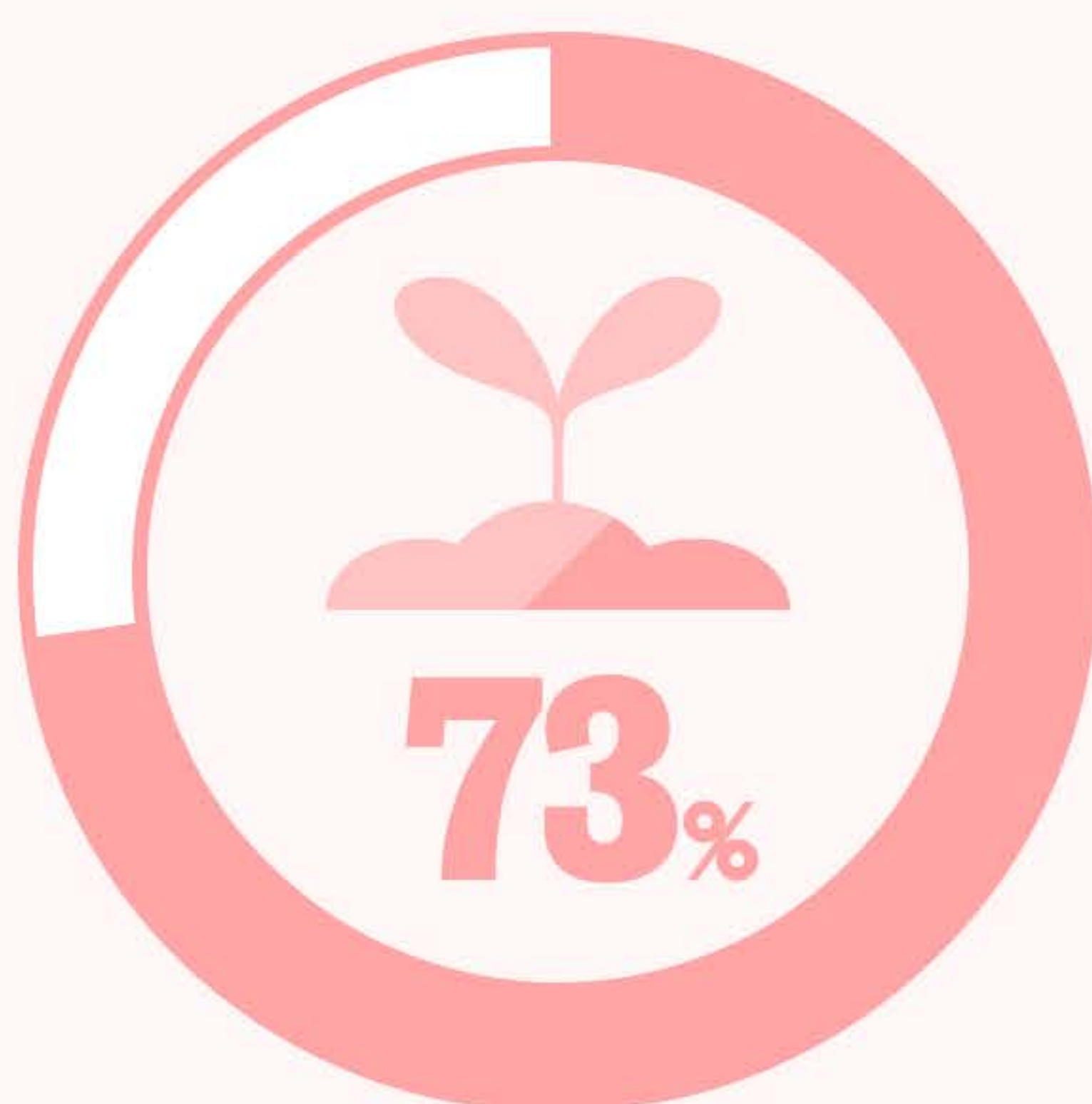
自ら采配を振れる	53%
農業が好き	42%
時間が自由	37%
農業はやり方次第で儲かる	36%
自然や動物が好き	29%
会社員に向いていない	26%
食物の安全性等への関心	20%

出典：全国新規就農相談センター「令和6年度新規就農者の就農実態に関する調査結果」



03

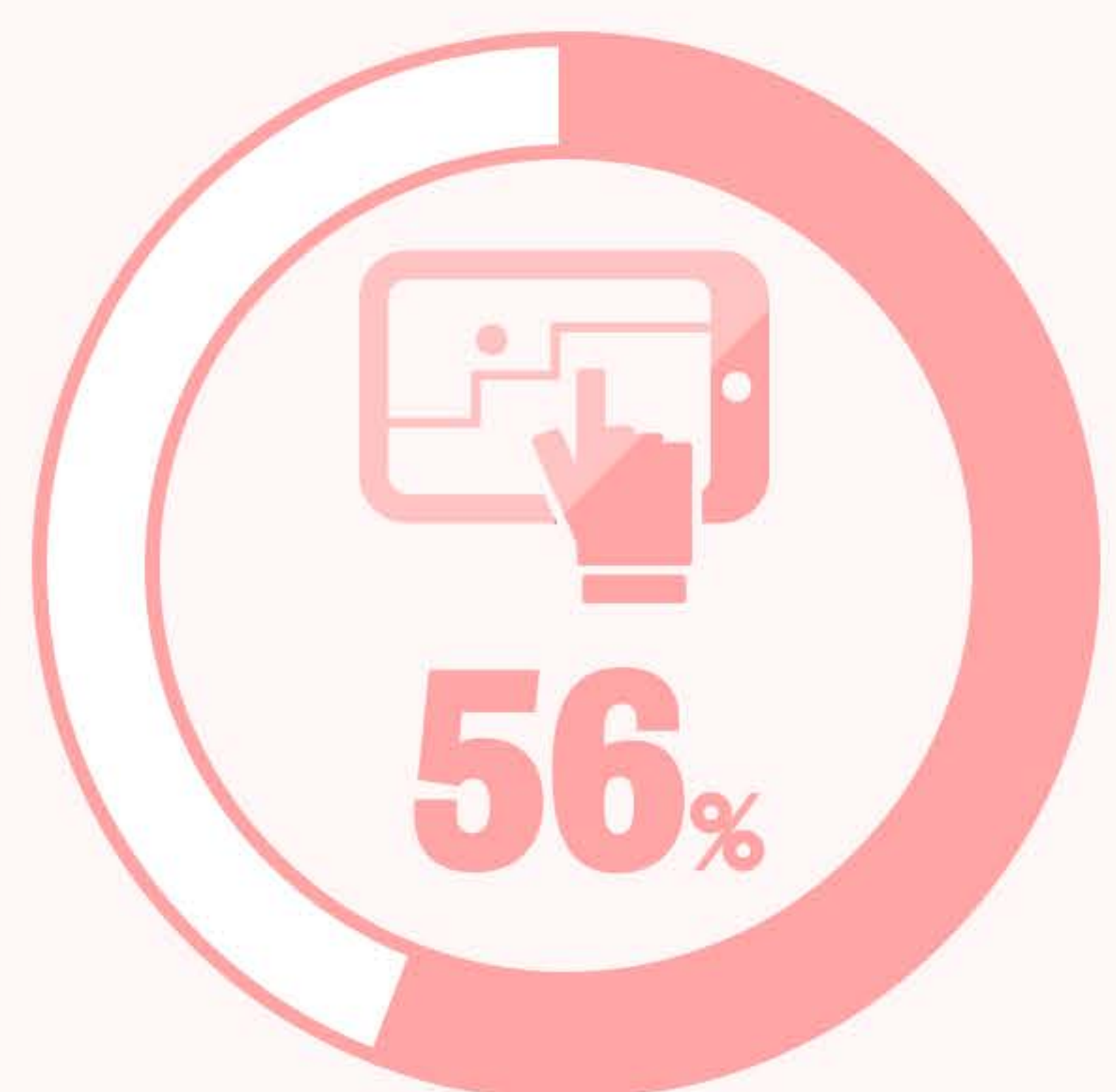
新規就農者の経営開始時の課題



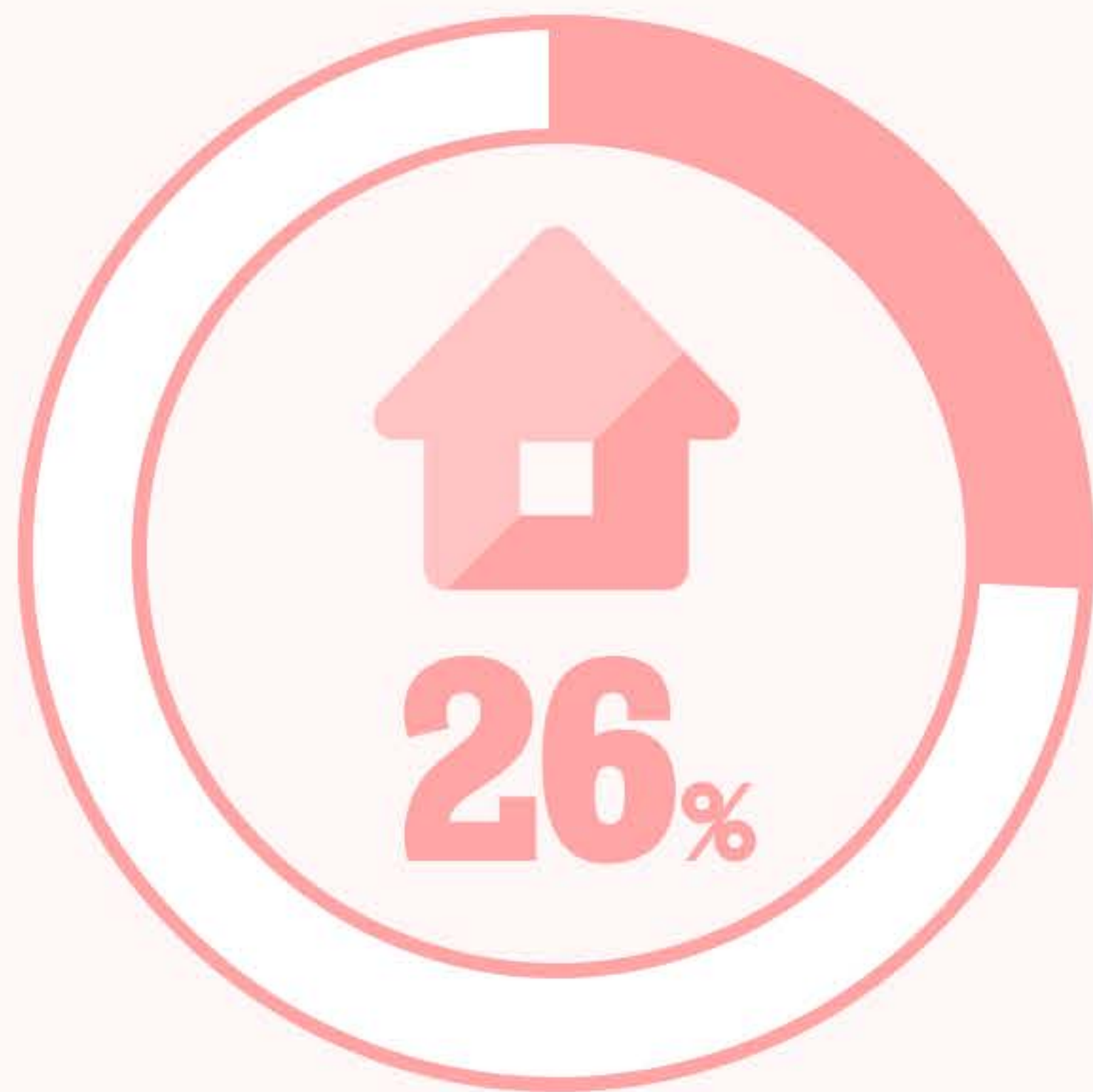
農地の確保



資金の確保



営農技術の習得



住宅の確保



地域の選択



相談窓口探し

出典：全国新規就農相談センター「令和6年度新規就農者の就農実態に関する調査結果」



＼ 9,000人の若手農業者が集う ／

4Hクラブの存在



4Hクラブは、20代～30代の若い農業者が中心のクラブです。科学的な思考をもとに技術を磨きながら、誠実に元気に働くための活動に取り組んでいます。

教えてくれた方



4Hクラブ 会長 前田彩花さん

いちご生産者。鹿児島県鹿屋市でいちご農園「Strawberry House彩」を経営。2017年に4Hクラブに入会し、2025年6月より現職。

プロジェクト活動

毎年開催される全国青年農業者会議では、全国から集まった会員が、日頃の栽培に関する取り組みや経営課題、働き方、地域との連携などについてデータをもとに発表したり、農業の現状に対する意見、これからの夢などを発表して意見交換を行うなど、たいへん盛り上がっています。





仲間づくり

全国に8つのブロックがあり、ブロックごとの会議や地域の行事も開催することから、全国各地の同世代の農業者や同じ作物を栽培する仲間たちと活発な情報交換をしながら刺激を受けています。会議後の懇親会では気軽にやりとりができるため、楽しみにしている人も多くいます。

地域交流

小中学生の農作業体験の受け入れや食育活動、高齢者施設での奉仕活動や祭りといった地域イベントへの参加、農作物の販売会などを行っています。交流は、地元住民の農業への関心を高めることや、農業者のやりがいにつながっています。さらに自治体との連携も深めています。



農業を知りたい人向け 就農イベントを開催！

「農業で働きたい」「農業を知りたい」「農業に関わりたい」皆さんを対象に、国内最大級の就農イベント、新・農業人フェアを開催しています。全国の自治体や農業法人が参加し、就農相談、支援や研修の情報、また働き方や地方移住などについても相談できます。

<https://agri.mynavi.jp/shin-nogyojin/>





今週のまとめ

農業の未来を担うのは、若手農業者です。仲間づくりの場を広げ、新規就農者を増やすためのイベントを開催するなど、様々な団体が若手農業者がやりがいをもって農業を続けるための取り組みを支援しています。

職業にしてわかった、

農業の魅力



農業には、たくさんの魅力があります。20代で就農した2人の若手農業者が、田畑で、農作物と向き合いながら見えてきた喜びや楽しさを熱く語ります。



2年かけて準備して



農家になった女性の物語

20代で、祖父母から地元の特産品である市田柿の栽培を受け継ぎ、直接販売を開始するなど自分なりの工夫を加えて農業を軌道に乗せた事例を紹介します。



Orchard muku. 奥村光希さん

長野県下伊那郡喬木村で、市田柿やさつまいも、クレマチスシードなどを生産・栽培。2022年に、祖父母が守ってきた農園を引き継ぐ形でOrchard muku.を開業。

ドクターズクローフとして働きながら2年かけて就農を準備しました。一番不安だったのは収入のことで、補助金制度を活用できる認定新規就農者を取得するなど、しっかり計画して進めました。



市田柿は500年続く特産品で、地理的表示(GI)にも登録されています。実った柿の皮をむいて全体を白い粉がまとうまで自然乾燥させます。手間のかかる伝統製法による最高品質の干し柿です。



紅はるかの栽培も行っており、こちらは栽培期間中、農薬や化学肥料を使用せずに育てています。収穫した紅はるかは干し芋にして販売。生産が追いつかないほどの反響をいただいています。



就農して気づいた

農業の魅力



01 自給自足のよろこび

自分たちで育てたものを自分たちで食べる。子どもと一緒に育てて収穫して食べる体験はとても尊いです。



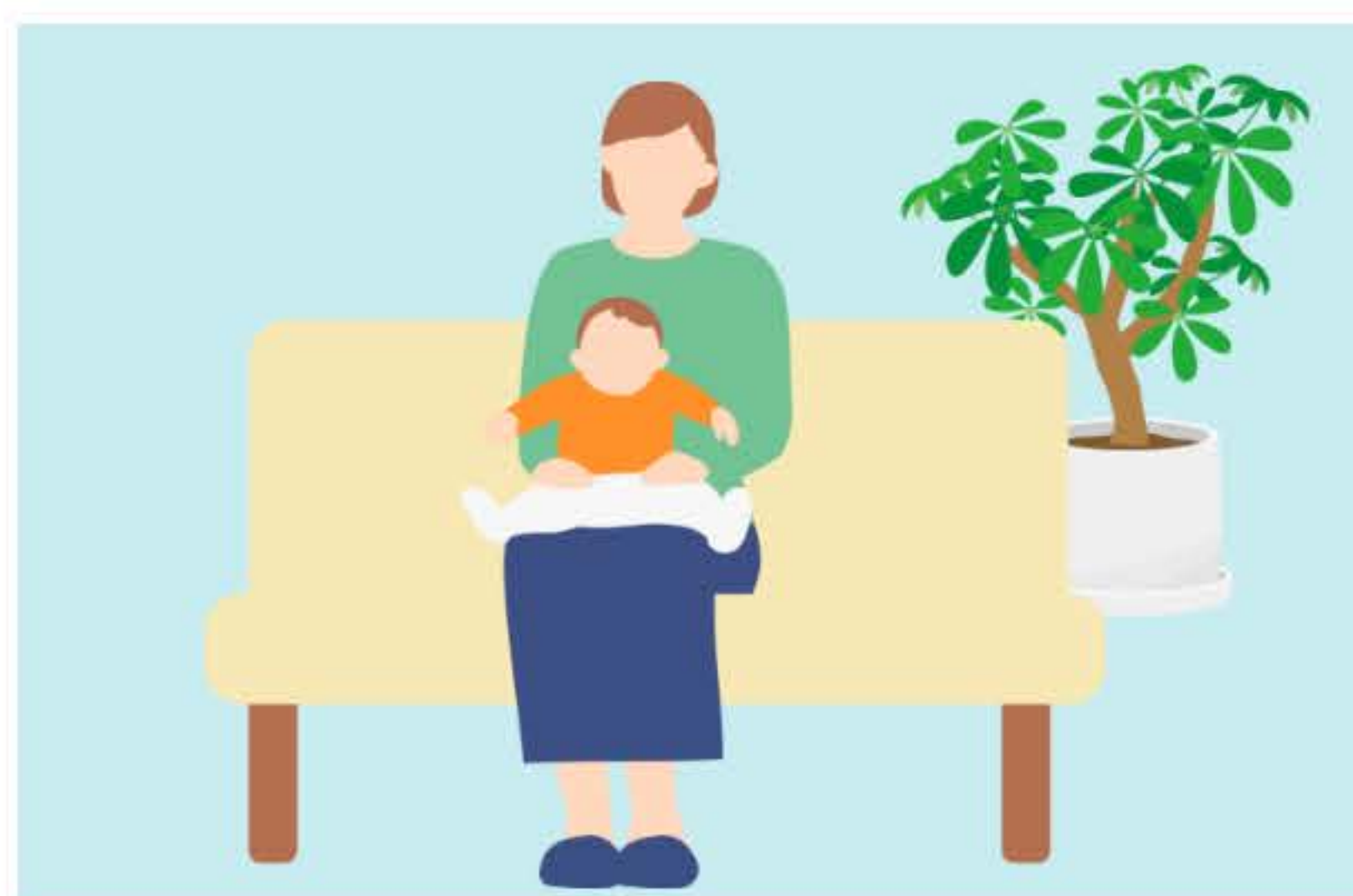
02 自然が心地いい

自然の中に身を置くのが好きで、畑にいただけで気持ちがいいです。雨にぬれても心地よく思えます。



03 時間を自由に使える

自分で時間を管理できるので、子育てとの両立もしやすいです。就農して子どもとの時間が増えました。





今後の展望



協力者を増やす

ひとり農家なのであらゆることをひとりで作業していましたが、2024年の繁忙期に地域を旅しながら仕事をする「おてつたび」参加者の受け入れを開始しました。参加者にも自分にとっても、とてもいい経験になっています。

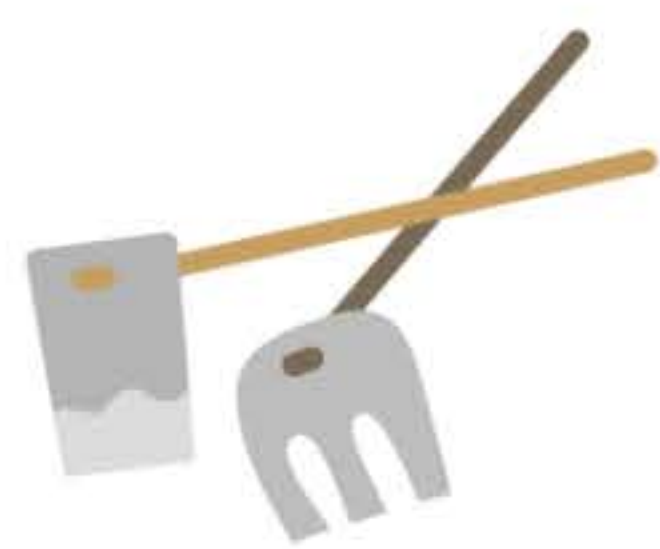
ブランディング

直接販売では、オリジナルデザインのパッケージでお届けしています。特大粒の「万嘉（ばんか）」、中粒の「雪霜霧（ゆきしろ）」、食べきりパックの「とみとゆ」があり、どれも最高品質のものを一粒一粒厳選しています。



海外進出

祖父母から受け継いで育てている市田柿のストーリーを発信しながら、海外進出について勉強中です。農林水産省とJAによる輸出支援プロジェクトに参加するなどして、チャンスをつかみたいと思っています。



移住後に就農し 地域のつながりを育む



後継者不足に胸を痛めて兼業農家としてスタートしたのは、地元出身ではない新規就農の若者でした。地域に溶け込み、農村の活性化に貢献しています。



あぼーぼら・いしまき農園、イシノマキ・ファーム 石牧紘汰さん

会社員生活を経て宮城県石巻市へ移住し、一般社団法人イシノマキ・ファームに転職。2022年に自身も就農し、あぼーぼら・いしまき農園を立ち上げる。

一般企業に就職して2年半後に、イシノマキ・ファームに転職し、新規就農希望者のサポートを担当していました。仕事を続けるうちに自分も就農したくなり、兼業農家としてスタートしました。



石巻市でブランドかぼちゃを生産する農家が後継者不足に悩んでいることを聞き、「おいしいかぼちゃが食べられなくなるのはもったいない」と思い、ベテラン農家のもとで学びながら栽培を始めました。



ダークホースなど10種類以上のかぼちゃを栽培し、年2回、7月と10月に収穫しています。通常は1株から5個以上なるところを、1個だけに絞って、凝縮した味わいのかぼちゃを育てています。



就農して
気づいた

農業の魅力



01

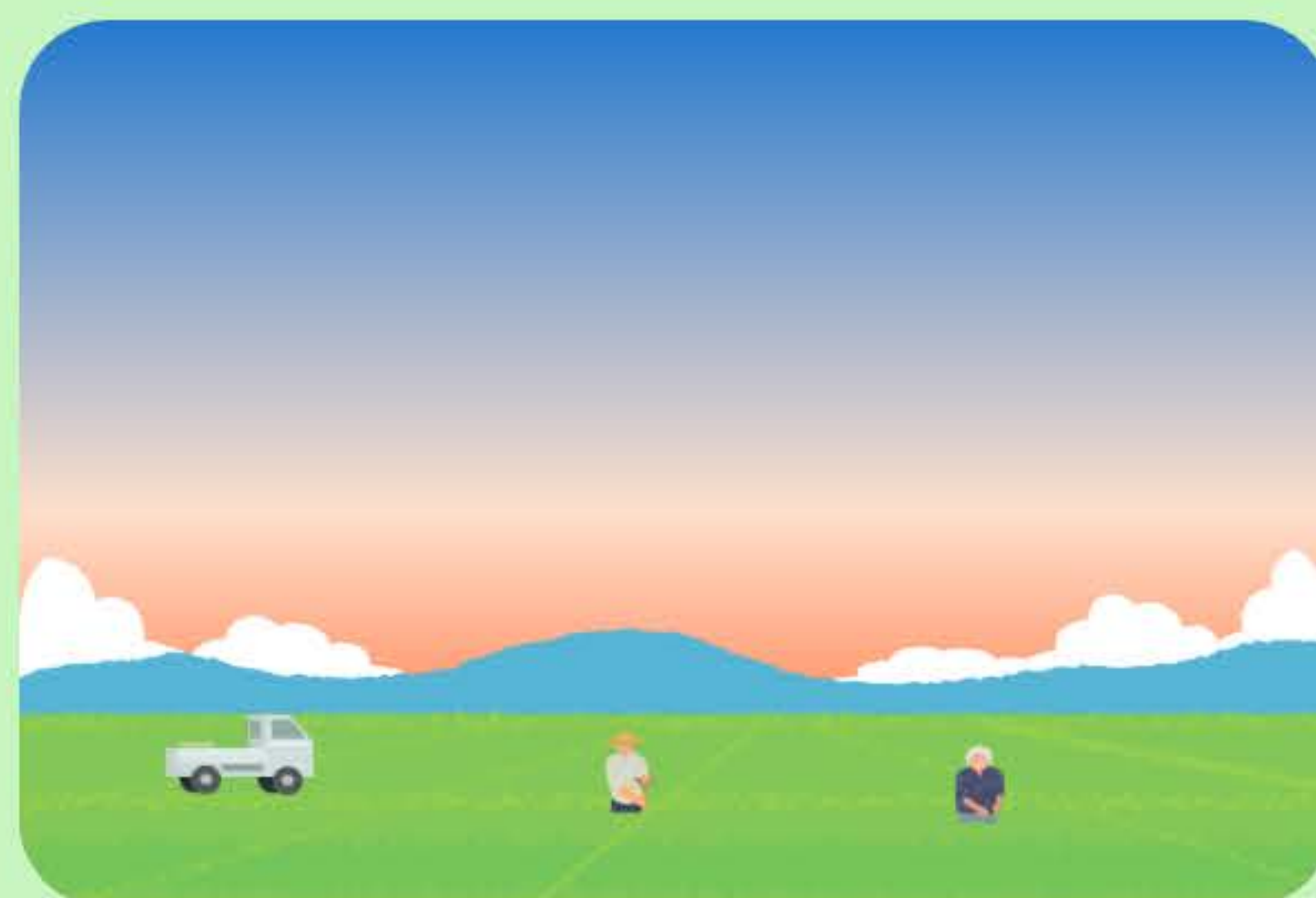
地域の つながりが広がる

地域の人たちとの付き合いが増えます。手伝いをしたり野菜をもらったり気さくなやりとりが楽しいです。

02

心が豊かになる

兼業農家なので朝は3時半から農作業をすることもあり、時間に追われているのに、心はゆとりがあります。



03

価値観を アップデートできる

社会問題について、消費者とは異なる、生産者の視点で捉えられるようになり、新たな視点を手に入れました。

今後の展望



活動分野の拡大

地域コーディネーターとして、子どもたちに農業の話をしたり、一緒にさつまいもの定植をしたりしています。農福連携にも取り組んで、教育や福祉などのジャンルともつながりが生まれています。



農園カフェを開業

家族と一緒に農園カフェを始めたいと思っています。お客様に出す料理には、自分たちの畑で採れた野菜を使って、できればその畑が見える場所で食事をしていただくような形で考えています。



農業を仕事にしたいと考え始めたり

農業をはじめる.JPIは、農業に興味を持った人や農業を仕事にしたいと考え始めた人に役立つ情報を集めた、就農のためのポータルサイトです。就農についてより深く知り、先輩たちの体験談に触れることができるほか、農業体験や研修の受付、就農相談窓口、求人情報、支援情報などを幅広く掲載しています。

<https://www.be-farmer.jp/>





今週のまとめ

農業に意欲的に取り組む2人の若手農業者は、地域も栽培作物も異なりま

すが、それぞれやりがいを感じながら、日々の農作業を続けています。

自分で決めて周りの皆さんとも協力しながら働く姿に希望を感じます。

農業は、魅力いっぱいの職業です。

農家として取り組む

情報発信



農家の皆さんは、どんなねらいやツールで情報発信をしているのでしょうか。それぞれのやり方で情報を発信している2人の若手農業者から、現場の声を届けます。



プラットフォームを横断して

農業の魅力を伝える



兵庫県南あわじ市の農場から、ウェブサイトやSNSで10年以上前から積極的に情報を発信し、農業ビジネスを発展させている野口ファーム。情報発信の方法やメリットを聞きました。



野口ファーム 代表 野口 俊さん



兵庫県南あわじ市生まれ。第2子誕生直前に会社員から農業者に転身し、2011年から野口ファームを開業。インスタグラムのフォロワーは21万人。

妻が家族のために育てた野菜を子どもたちが「美味しい!」と喜んでくれた姿が野口ファームの原点です。mama-yasaiと呼んでいます。



たまねぎの収穫開始は5月で、12月には売り切れていたのですが、数年の試行錯誤の結果、11月に収穫可能となり、通年販売も実現しました。



年間30品目~40品目の野菜を栽培し、消費者や青果店、レストランに直接販売するほか、産直ECサイトやJAにも出荷しています。



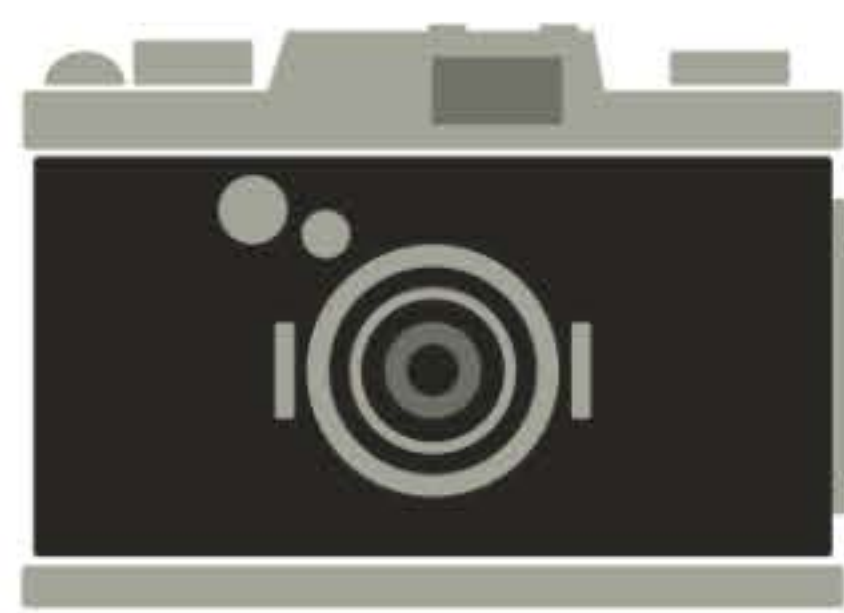
野口ファームが
取り組む

さまざまな情報発信



Facebook

情報発信のスタートはFacebookでした。日々の農作業について書くのとたくさんの反響があり、どんどん楽しくなりました。



Instagram

最近、一番頻繁に更新しています。主婦の方たちからの反応が多い印象です。最新情報を発信し続けることが大事だと思います。



YouTube

しっかりしたコンテンツは長く見てもらえるので、自分たちが伝えたいことをうまくまとめて発信することを心掛けています。



TikTok

外出自粛期間にスタートしたところ、多くの新規顧客の獲得につながりました。Instagramとはまた異なる層の方にリーチできます。



Podcast

stand.fmで、農業を続けてきて気付いたことからビジネスに役立つ知識や考え方まで、自分自身の経験をもとに話しています。



レシピ紹介

購買者の方から届いたレシピを公開しています。基本フォーマットを作ってどなたでもレシピを作成しやすいよう工夫しています。



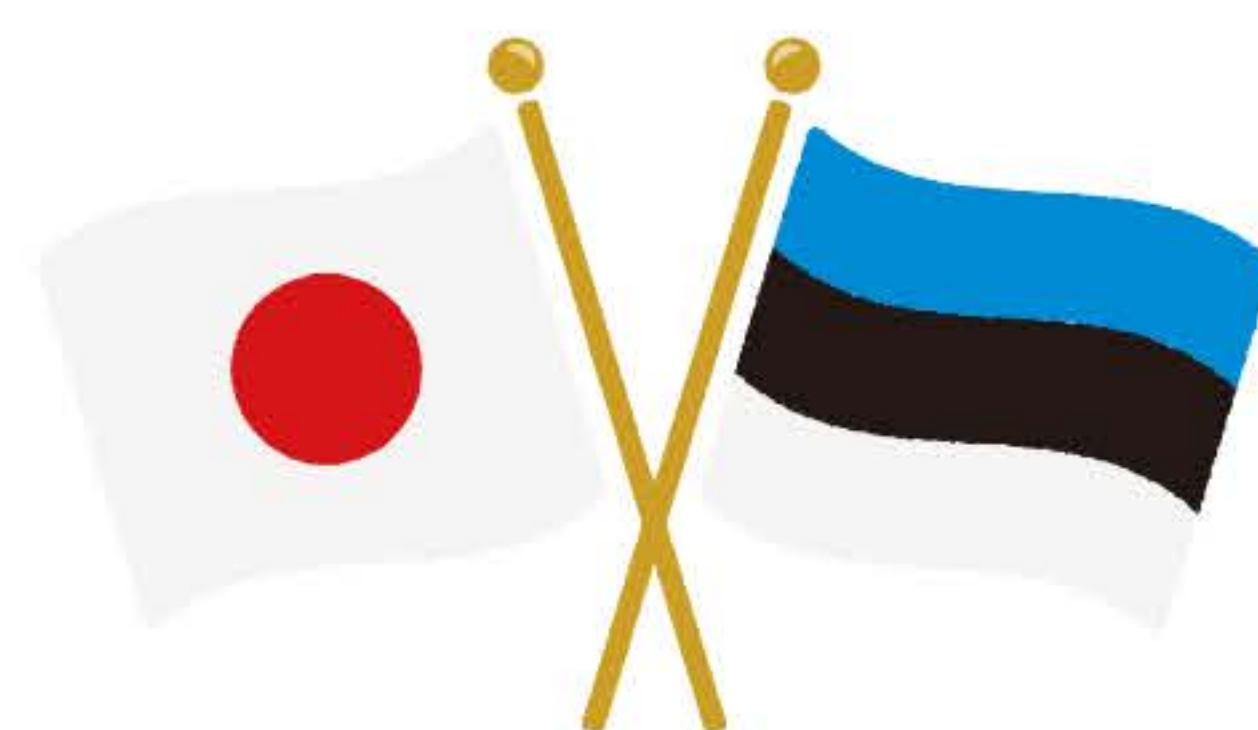
ウェブコラム

「かぼちゃの食べ方」などテーマを決めてコラムを掲載すると、検索からたどりつく人が増え、オンライン販売につながります。



オンライン販売

毎月野菜セットをお届けする定期便、単発の野菜セット、旬の野菜や米などをオンラインで販売し、売上も順調に伸びています。



国際交流

エストニアのNext innovationという企業と共同で、日本とエストニアの農業をリアルに学べるS☆koolを運営しています。

＼ 情報発信することの／ メリット

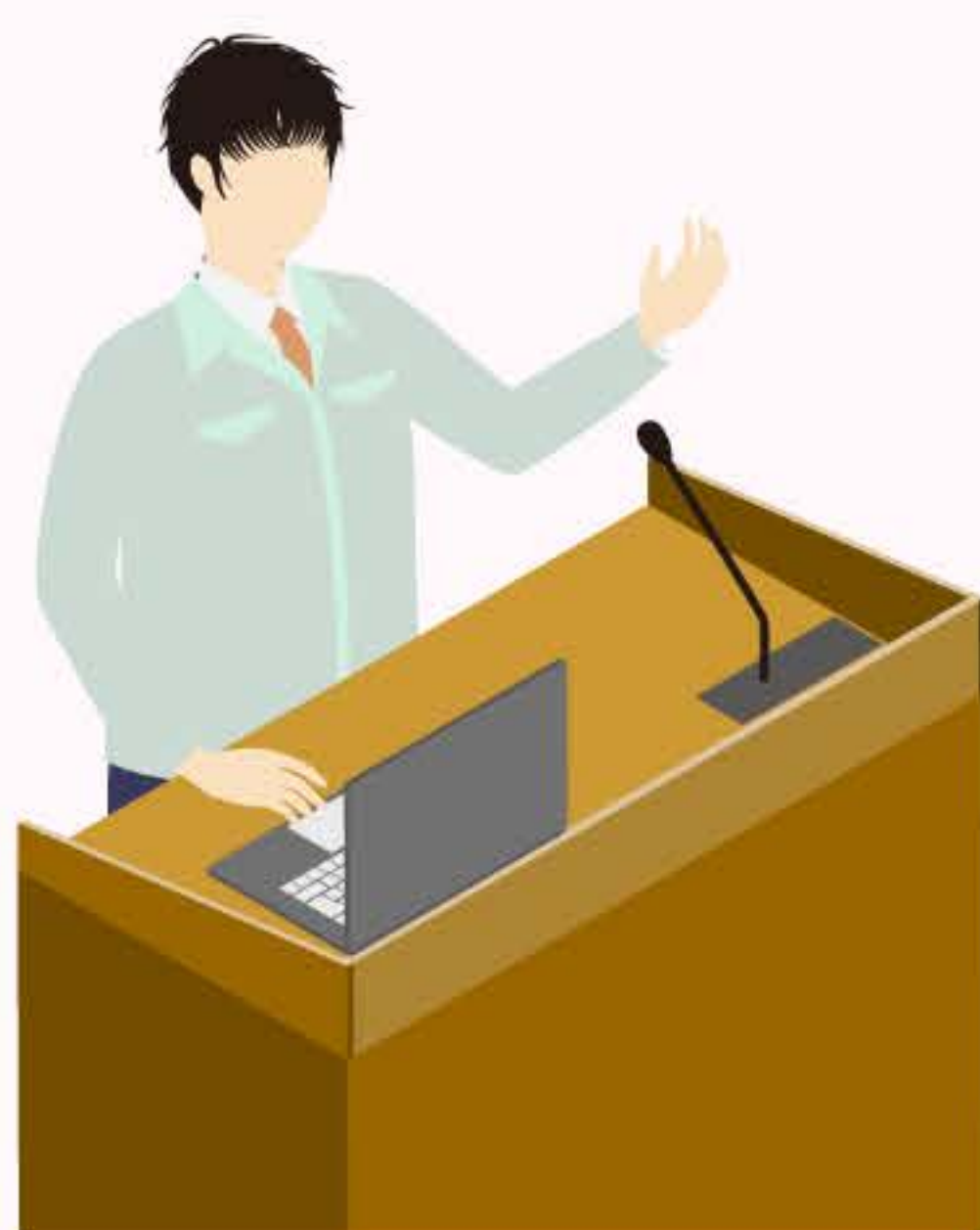


購買者がファンになってくれる

農産物とともに、自分たちのことを身近に感じてもらうことで、購買者がファンとなり、心強いサポーターのような関係を築くことができます。

新たなつながりが生まれる

これまで野口ファームを全く知らなかった人に知ってもらうきっかけになります。遠くの人にも声が届きます。



ビジネスチャンスが得られる

農作物の販売の仕事だけではなく、アドバイザーや講演の依頼など新たなビジネスチャンスが生まれるきっかけになります。

スキルアップにつながる

農業者や他業種の人たちとの交流を通して、それぞれの得意なことを教え合う関係が生まれ、スキルアップにつながります。





Instagramで 農業のリアルを発信



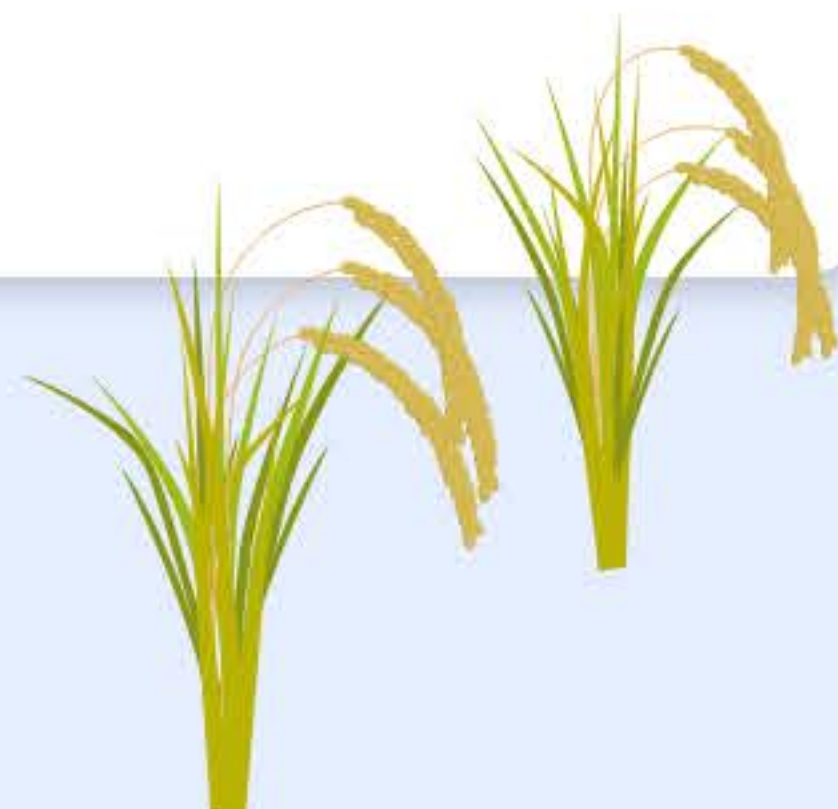
山形県酒田市の若手農業者、本多郁也さんは就農時からSNSを使って情報発信を始め、米の直接販売が年々増加。農業者の知り合いも増えました。



本多農園
本多郁也さん

山形県酒田市生まれ。会社員を経て、2021年より家業の本多農園で祖父や妻とともに米栽培を行う。SNSでは、「24歳農家夫婦の日常」というアカウントで情報を発信。

鳥海山の麓にあるこの地域の米は、ブナの原生林から流れるミネラルを豊富に含んだ水で育つことから美味しいと評判です。



2021年からオンライン販売を開始しました。直接販売の比率は年々高くなっていて、これからも増やしていきたいと思っています。



稲作に農機は欠かせません。最近はドローンや色彩選別機、乾田直播用の機械も加わりさらなる高品質、省力化を目指しています。



情報発信で得られること



消費者の声が直接届く

直接販売が増えて、消費者とダイレクトにつながるようになりました。米を食べた感想も届くので、とても励みになります。

学びの機会が増える

農業者の知り合いが増え、栽培データの活用方法や流通ルートの開拓、補助金や経営面のことなどを学ぶ機会が増えました。



情報が広く行き渡る

山形県の豪雨災害時に動画で情報発信したところ、惨状が瞬時に伝わり地元にたくさんの支援物資が届いてとても助かりました。

官僚系YouTubeチャンネル BUZZ MAFF（ばずまふ）

農林水産省でも、職員自らが発信者となってさまざまなコンテンツをお届けするYouTubeチャンネル「BUZZ MAFF（ばずまふ）」を運用しています。日本の農林水産業に関する魅力の発信から、知られざる農林水産省職員の姿に迫るものまで、多数の動画を公開中。ぜひこちらからご覧ください。

YouTubeチャンネル：<https://www.youtube.com/BUZZMAFF>



今週のまとめ

農家の皆さんにとって情報発信には、販売やPRに繋がるだけでなく、多くのメリットがあります。自分たちのことをたくさんの人に知ってもらうことで、新たなつながりが生まれ、知識が深まり、ビジネスチャンスが広がります。情報を受け取る消費者も、選択の幅が広がります。

若手農業者もつながり広がる

協同組合



若手農業者を支援する組織のひとつに全国農協青年組織協議会（JA全青協）があります。さらにJAグループや協同組合の多岐にわたる事業も大きな支えとなります。



若手農業者を支える

JA全青協の存在

JA全青協は、若手組合員間の交流を通して、農業を取り巻くさまざまな課題の解決に向けて取り組んでいる組織です。会長の横顔と併せて組織の活動内容を紹介します。



全国農協青年組織協議会 会長 北川敏匡さん

ファーマーズ キタガワ代表。2013年に会社員から転職し専業農家としてスタート。
2022年JA三重青年部会長に就任。2025年全国農協青年組織協議会会長に就任。



主力商品はイチゴです。栽培している「よつぼし」という品種は味も見た目もよく、フルーツタルト専門店でも使ってもらっています。



イチゴの収穫が終了すると、6月中旬から10月はトマトが収穫期です。ミニトマト「アイコ」やミディトマト「フルティカ」などを栽培しています。

JA全青協は、おおむね20歳から45歳までの青年層が中心となった組織で、全国に約5万人の構成員がいます。全国各地に約400のJA青年組織があり、私は、JA三重青年部のほかにイチゴ部会にも所属し、情報交換や視察などを通して交流を深めています。

つながりが増える!

JA全青協の活動

情報交換

作物別・課題別部会を年4回開催して情報を交換し、学習しながらスキルアップを図っています。



研修・セミナー

組合員の取り組み事例の紹介や農業政策の決定背景の解説などを行なうセミナーのほか、海外研修を実施しています。



JA各団体との連携



JA全国連の理事会や経営管理委員会に参画するほか、農業者団体連携プラットフォームの取り組みにも参画しています。

情報収集・発信



ホームページでは、組織の解説や取り組みを紹介するほか、FacebookやInstagramでも発信しています。

外部団体との連携



JF全国漁青連や米国ファームビューロー連盟（AFBF）の青年組織と定期的に意見交換を実施しています。

大会、会議

JA全国青年大会を毎年開催し、組合員同士の交流を深めるほか、執行部の会議も定期的で開催しています。



政策提言

作物別・課題別部会での協議をもとに、国会議員や行政に農業現場の要望を伝える政策提言を行なっています。



\\ 経営から暮らしまでカバーする //

農業協同組合 JA

JAグループは、肥料や農薬等の資材の共同購入、農畜産物の共同販売のほか、信用事業や共済事業等幅広い事業を展開し、事業ごとに組織を形成しています。



社会を支える 協同組合

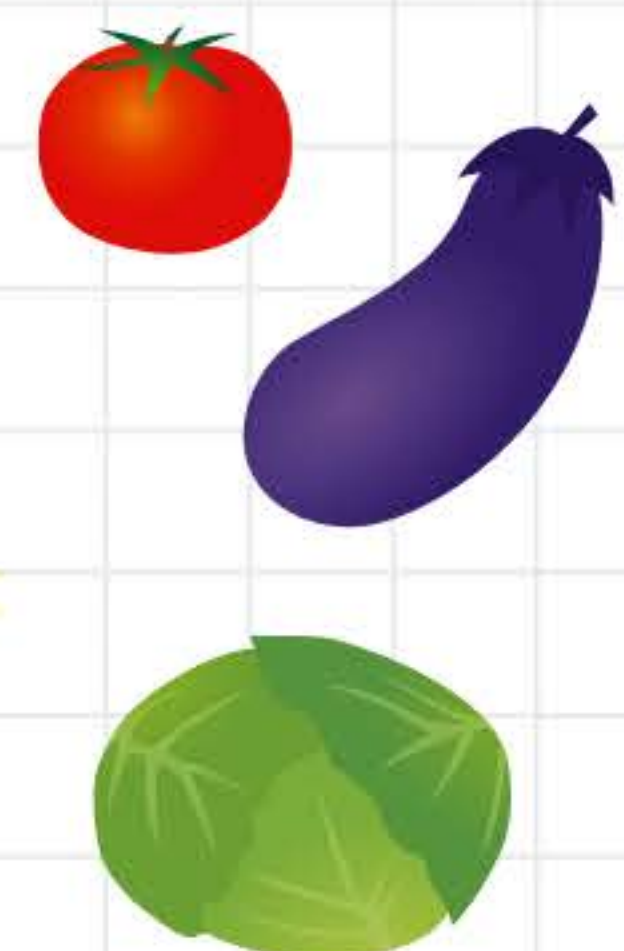
協同組合は、農業や林業、漁業、介護・福祉などそれぞれのニーズや願いを持った人同士が自発的に集まり出資し、事業を通してそれを実現する組織です。



全国各地には、農業協同組合（JA）、漁業協同組合（JF）、生活協同組合など、様々な協同組合が存在します。JAと生活協同組合が連携して、農業体験や、食、農、地域をテーマにした意見交換会などを実施することで、地域の農産物等への理解を深め、支える体制を推進しています。



国際協同組合デー 協同組合フェスティバルを 潜入レポート



国際協同組合同盟（ICA）は、1923年に7月第1土曜日を国際協同組合デーに制定。今年は、協同組合の魅力を伝える協同組合フェスティバルが開催されました。



7月5日に東京国際フォーラムで開催された協同組合フェスティバルには、JAやJFなどの組合員や消費者ら約4,000人が来場。出展ブースやステージなどを楽しみながら、協同組合の活動への理解を深めました。

会場内の出展ブースでは、JAによる農産物の直売のほか、サンプルの配布や体験型の活動展示などが行われ、若手農業者も消費者と触れ合いました。ステージでは協同組合にまつわるクイズなどが行われ盛り上がりしました。



ステージでは、高校生がチームで社会課題解決のアクションアイデアを考えるコンテスト「SDGs QUESTめらい甲子園」の受賞チームが、持続可能な社会にむけたSDGsアクションアイデアを発表しました。

写真提供：IYC2025全国実行委員会

2025年は国際協同組合年

2025年は国連が定めた国際協同組合年（International Year of Cooperatives：IYC2025）です。今回のIYC2025を通じて、「協同組合はよりよい世界を築きます」というテーマのもと、協同組合の振興や、SDGsなどの社会課題の解決に向けた取組への貢献に対する認知向上のための活動が展開されます。IYC2025のロゴマークは、よりよい世界を築くために世界中の人々が互いに結びつく様子を表しています。



国際協同組合年

協同組合はよりよい世界を築きます

今週のまとめ

協同組合は、様々な人々の仕事や暮らしをお互いに助け合う組織です。

若手農業者の周りでも、仲間との交流の機会を創出するJA全青協や、農

業経営等を多角的にサポートする各地域のJAなどが、安心して農業に取

り組めるような活動を行っています。